朝日新聞

2011年（平成23年）
7月3日
日曜日

2 3 5 7 総合
8 国際
10 オピニオン
11 12 13 14 読書
15 16 17 18 スポーツ
19 教育
20 囲碁・将棋
21 22 生活　25 小説
23 地域　24 関西総合
26 27 28 テレビ・ラジオ

朝日新聞大阪本社
〒530-8211 大阪市北区中之島3-2-4
電話 06-6231-0131　www.asahi.com

紀のひと

「第二の青洲に」志高く

乳がんとの闘いに寄り添う医師

梅村（うめむら）　定司（ていじ）さん（44）

6年前、進行した40代の乳がん患者を担当した。あらゆる治療に手を尽くしたが亡くなった。患者の娘は当時小学1年生。母親が身に着けていた衣服や、使っていた点滴の道具をぎゅっと抱きしめながら病室をあとにした。その様子が記憶には刻まれている。

橋本市岸上の紀和病院が2009年9月に敷地内に開設した紀和ブレスト（乳腺）センターのセンター長を務める。乳がんの検診、診断、治療を専門に行う県内初の施設だ。乳がんの専門医になることは、医師として長い間求めていたことだった。

乳がんは日本人女性の16人に1人がかかるといわれる。他のがんより治療期間が長く、進行の度合いによっては乳房の切除というつらい選択をすることもある。専門医として患者一人ひとりのがんとの闘いに徹底的に寄り添う。

疑問や不安が解消するまでとことん話し合う＝橋本市岸上の紀和ブレストセンター

紀の川市出身で、小学生のころから医師を志した。理由は二つあった。

一つは、整骨院を経営する父親のように「人の役に立つ仕事」に就きたいと思ったこと。もう一つは、小学生の時、華岡青洲（1760～1835）について学んだことだ。世界で初めて全身麻酔による乳がん手術に成功した青洲の生誕地が実家から約1キロしか離れていなかったことを知り、誇らしく感じた。

乳がん治療を志したのは県立医大医学部在学中。治療の選択肢が多様で他のがんと比べて医師の力量が問われる点にやりがいを覚えた。ただし、乳がん専門の医師や施設が必要だという考え方は一般的でなかった。外科の勤務医として、乳がんに限らず様々な外科手術を手がけてきた。

紀和病院から誘いを受けて実現したセンターには、乳がんに精通する専門医の玉置剛（たかし）司医師（47）や看護師らがそろう。マンモグラフィー、超音波、CTなどの最新の検査機器を駆使し、早期発見に全力を挙げる。乳がんは早期発見で治療すれば完治できる可能性が高いからだ。「おこがましいかもしれないけれど、第二の青洲になりたい」

（山野拓郎）